

書評と紹介

秋庭裕・川端亮著

『霊能のリアリティへ』

——社会学、真如苑に入る——

新曜社 二〇〇四年六月二〇日刊
A5判 viii 十三四五四頁 四三〇〇円十税

伊藤 雅之

一 本書の目的

本書は、大般涅槃經を中心的教義とする仏教系新宗教団体、真如苑への本格的な研究書である。真如苑は、一九三六年、伊藤真乗、伊藤友司夫妻により立照閣として東京都立川市に設立された。その後、真言宗醍醐派立川不動尊教会、まこと教団と改称されたが、一九五一年に現在の真如苑となっている。真如苑創設当初からの独自の修行形態に「接心」と呼ばれるものがある。これは、ミーディアムと呼ばれる霊能者を鏡として自己を写し出し、霊能者の発する霊言を手がかりに自己を客観的に見つめる修行のことである。真如苑では、接心の場に顕われる自己や他者を悟りの境地へと導く力を「霊能」と捉えている。設立当初には、真乗夫妻が直接行っていた接心だが、現在では、大乗、歓喜、大歓喜を経て、霊能の霊位に達した霊能者により実践されている（本書第1章より）。なお、真如苑の公称信者数は約八六万人、霊能者は一八七三人（二〇〇三年一月時点）である。

本書では、真如苑のきわめて大きな役割を担っている霊能者の活動内容を社会的に描き出すことをその目的の一つとしている。また本書は、宗教という「科学が依拠する合理的・客観的な方法によつては、まっすぐに切り込むことができない」対象をいかにして記述するかを試みでもあるという。著者である秋庭裕、川端亮の両氏は、すでに新宗教や社会調査一般に関する多数の論文を発表している四〇代の気鋭の宗教社会学者である。本書は、著者たちが一九九〇年に真如苑への調査を開始してから一五年、執筆から脱稿まで実に一〇年の歳月を費やし、多様な社会科学的方法アプローチを駆使して「霊能のリアリティ」を解明しようとした労作であり、その試行錯誤の成果は本書の随所にも示されている。

本書の構成はつぎのとおりである。

はじめに

第1章 方法論ノート

第2章 教えの創成

第3章 霊能者とネットワークの計量的分析

第4章 霊能の計量テキスト分析

第5章 霊位向上の物語

おわりに

二 各章の内容紹介

まずは各章の内容を紹介しよう。

第1章では、研究対象である真如苑の概要をまとめたあと、

真如苑の研究史を概観し、先行研究におけるテーマやアプローチ、問題意識などを検討している。つぎに、本書で用いる方法論をめぐって詳しい議論を展開している。まず、社会調査の観点からすれば、宗教研究の対象となる人間的な現象を共感的な視点から捉える「内在的理解」は聞き取りや資料に依拠するライフヒストリー法であり、また宗教研究でしばしば用いられるもう一つの調査法である「体験的身体的理解」は参与観察法に該当するという。しかし、これら従来の宗教研究の方法は、個々人の経験に焦点をおいた「虫瞰図」を提示することには優れているが、宗教世界全体の把握、すなわち「鳥瞰図」を描くことには適していない。それを補うのが、調査票によって集められたデータを解析する統計的手法であるという。本書では、こうした計量的方法のみでなく、従来の質的データ分析やその記述方法にも工夫をこらし、「濃密」で「開かれた」記述を試みるとしている。

第2章では、真如苑の教義と教えに生きる人々のリアリティを、教団内外に向けて理解可能な像として、濃密に記述することをめざしている。そのため、教えのリアリティを損なうことのないよう、メタファーやアナロジー、モデルや理論を動員しつつ、教団内外の広範な読者の読みに耐えるように、独自の「文体」の創出を試みている。

この2章には、(注や文献リストを除く)本文全体の半分弱にあたる約一三〇ページが充てられ、おもに真如霊能や霊界が確立される一九六七年までの歴史が丹念に描かれている。ここで扱われるトピックは広範にわたり、伊藤真乘(幼名、文明)

と彼の妻となる内田友司の生い立ち、彼らの宗教への関心や修業の内容、夫妻の長男・次男の幼少での死去を契機とする真如霊界の確立、設立当時の接心の様子や霊言独特の文体、「まこと基礎行」によって一般教徒に霊能が相承できる道が開かれるようになったプロセス、さらには、現在の大乗、歓喜、大歓喜、霊能の四つの霊位が一九五三年以降、段階的に確立されていく経過も詳しく論じられている。こうした濃密な記述のなかには、記述スタイルの創意工夫が随所に埋め込まれている。たとえば、霊能者と接心、霊言に関する記述のなかには、「霊能者を鏡とする接心修行のなかで、自分の知らない自分に出会うことで、自分も知らなかった私が主人公である物語を読み解くことが可能となるのである。そういう読解を可能にする地平として、真如霊界は理解されているし、そういう一点から霊言は発せられているのである。」(八一頁)との鋭い指摘もある。

第3章では、霊能者へのアンケート調査の結果がまとめられている。調査票は、一九九一年当時活動中であった霊能者のほぼ全員にあたる八一三人に配付し、回答を得た六一八人の結果を計量的に分析している。霊能者の属性については、女性が多く(五八・九%)、五〇歳代を中心に分布し、学歴は大学卒、高校卒がほぼ同じ四七%、男性の職業では経営・管理者の割合が高い結果となっている。つぎに、霊能者の入信時期としては、一九七〇年代が圧倒的に多く(五一・九%)、入信時の年齢では三〇歳代が最も多い(三二・四%)。また、本人が家族の中で最初に入信した人々の入信動機としては、「病氣」や「家族の問題」、「商売・職業の問題」などをまとめた現世利益的な動機、

書評と紹介

また「霊的なものに対する関心や接心を受けたい」など真如苑独自の教えに関わる動機がそれぞれ全体の四分の一ずつを占めていることがわかった。さらに、著者たちは、信仰の段階が進むにつれて現世利己的な動機は減少し、反対に真如苑の独自の教えに関わる動機が増加していくという、入信動機の変化についても明らかにしている。

また本章では、真如苑の信者数の変化についても究明している。これまで真如苑は一九七〇年代以降に発展した教団の一つとして取り上げられてきたが、信者数や霊能者の人数の増加などのデータを分析した結果、「真如苑の成長は一九七〇年代前半から半ばにかけては停滞に近い低成長の時期であり、七七、八年を境に本格的な成長に転じ、八〇年代にはいって急速に成長したと考えられる」（一八一頁）としている。それに呼応する霊能者の特徴の変化として、一九七〇年頃の霊能者には、二〇歳代、三〇歳代の青年層が多かったが、現在では、中高年の女性が増えつつあり、七五年から八〇年の間はかなり大きく変化してきたと指摘する。そして中高年層の増加については入信してから霊能者になるまでの年数が長くなってきたことが大きな要因であると論じている（一九七〇年までの霊能相承に要する年数は九・六六年、一九八六年以降では一七・一六年）。

第4章では、3章で用いた霊能者への質問紙調査のうち、「大乗、歓喜、大歓喜、霊能それぞれを相承する際に最も重要な取り組みは何か」を問う自由回答の記述に焦点をおいて分析している。これは、AUTOCODEというコーディング支援プログラムを用いて真如苑の霊能を記述するという画期的な試み

である。手順としては、自由回答のなかで四九〇の文字列を選び、意味の似通っているものをまとめ、全部で四五のカテゴリに分類する。そして、各霊位相承段階での頻出度、および四段階の霊位ごとにカテゴリー間の関連を調査する。結果として明らかとなったのは、大乗で見られた「家族」「感謝」「おまかせ」「教え」「両童子様」「双親さま」というバラバラの三つの結びつきが、大歓喜を経て霊能に至ると、とくに「教え」ということばを中心に結びつけられていくことである。また、信者は霊能の段階的な取り組みのなかで「家族的な共同性」に加え、「個を越えたところにある一般性」をことばの中に加えていくことによって、信仰が深まっていく傾向があると論じている。このように、著者たちは計量テキスト分析を巧みに用いることにより、霊能者の信仰の深まり、世界観の変化をみごとに描き出すことに成功している。

第5章では、4章で明らかとなった「個を越えたところにある一般性」とは何かを具体的に示す試みをしている。前半では、一九九一年に真如苑本部で実施したAさん（一九六二年生まれ、本部にパート勤務の女性）への一時間半のインタビューをもとに、霊位向上の過程を分析する。インタビューしたテキストは、入信、大乗相承、霊能相承など九つの段階に区切り、各時期での主要コードの頻度に着目して「信仰史のマップ」を作成している。結論として、Aさんの霊位向上のメインテーマは「おまかせ」であり、それを節目ごとにみれば、「両童子さま」が大乗の相承に向けて、「教主さま」が歓喜から大歓喜にかけての、そして「おまかせ」と「家族」が霊能相承にかけ

での取り組みのテーマであったと要約している。

5章の後半では、Bさん（男性、一九三一年生まれ）の事例を提示しつつ、信仰の「物語」としての側面に焦点をおく。より具体的には、「リアルな生の経験や宗教的体験が、しだいに『体験談』へと構成され、やがて『物語』へと醸成されることの意義と意味を汲みながら」（二五九頁）真如苑の霊能者の語る霊位向上の物語を分析する。Bさんの事例を含む真如苑霊能者においては、〈感謝〉が信仰物語のキーワードとなっている。その感謝は、「霊位の上昇とともに、じつに抽象度の高いレベルで、一般常識的には感謝しにくい、感謝の対象としては見いだしにくいものへの感謝が、執拗なまでに繰り返し求められている」（二九七頁）と論じる。そして真如苑で霊能者になるためには、倫理的に高潔であることが要請されるとし、「真如霊能は、倫理としての霊能という性格を色濃く備えている」（二九七頁）と著者は結論づけている。

「おわりに」では、まず霊能の社会学的理解をまとめている。端的に言えば、真如苑における霊能とは、「双親さま」「両童子さま」「感謝」「教え」「家族」「おまかせ」「とらわれのない心」「教主さま」「祈り」の九カテゴリーが結びついた「霊能の関連図」（二二四頁）を示すことが適切だとしている。また、真如霊能が、教えを生きる人々に与えるものとして、「真如霊能は、倫理としての霊能という性格」（三〇〇頁）を持ち、その教えは現世的な救済観を特徴とすると論じている。

「おわりに」の後半では、教団の発展した要因についても究明している。真如苑は、一九七〇年代に霊能者を最大限効率よ

く養成するために組織や制度を合理化しており、こうした制度上の変更によって、一般信者は素質に関係なく、強い信仰心と努力があれば、誰でも霊能者になれる道が開かれたと指摘する。著者たちによれば、「霊能という元来、業績主義や能力主義になじみにくい領域への、業績主義、能力主義の導入」（三〇五頁）は注目に値し、努力によって目標が達成される組織となった八〇年代の真如苑は日本社会で受け入れやすいシステムであり、教団の急成長へとつながったのだと分析している。

三 本書へのコメント

本書では、宗教研究に対するきわめて高い問題意識をもち、精緻な調査手順をふまえたうえで、得られたデータ、資料に対する鋭い分析、解釈が加えられている。各章における記述のほとんどは十二分に理解できる明晰なものであり、評者としては大いに知的好奇心をそそられつつ、本書を読み進めることができた。こうした全体的な高い評価を大前提としたうえで、本書への多少欲張りな論評をしたい。

評者が最も気になったのは、本研究の成果がどのような研究領域に貢献するものなのかについて十分な記述がなかった点である。本書の1章において、先行研究としてレビューされているのは宗教学、社会学における真如苑研究のみであり、ほかの新宗教を含む宗教現象を扱った研究への言及は本書全体においてもあまり多くない。本書がもつ真如苑理解を越えた研究意義、貢献する研究領域について明示されていればよかつたように思う。

書評と紹介

つぎに本書の内容に限定した批判を述べたい。それを端的に言うなら、各章はそれぞれの目的に向かって実に巧みに描かれているが、そのパズルをつなぎ合わせて見えてくるはずの全体像が何であるのか、多少評者には分かりづらい面があったことである。以下では、本書が描き出す全体像をめぐって、おもに二点に絞って若干のコメントをしたい。

1 霊能と霊能者をめぐって

本書が説明しようとしている第一の全体像は真如苑の霊能者、およびその人たちの有する霊能の特徴であろう。第3章、4章で扱ったアンケートは、調査当時の霊能者ほぼ全員への配付という念の入れようである。とするならば、本書が鳥瞰図を提示する対象は、調査当時、真如苑信者全体の〇・一％にすぎない霊能者のみということになるのだろうか（調査当時、信者は六七万人、霊能者は八二四人）。

教団のトップエリートである霊能者が獲得する「霊能」をめぐって、本書では、計量的分析、計量テキスト分析、濃密で開かれた記述、物語論による理解を駆使して、その特徴を描き出すようにする。そして著者たちは結論部において、「修行者である一如教徒は、霊能相承に近づくほど、倫理的に高潔であることが要請される」点に着目して、「真如霊能は、倫理としての霊能、という性格を色濃く備えているだろう」（二九七頁）と論じている。

こうした倫理的側面は、霊能者が一般信徒と接し、接心を執り行う際に求められる道徳的な要素ではあるだろう。だが、組

織幹部に人格者であることを要請し、またそうした地位に就こうとする当事者も倫理性に関する自覚が生まれるのは何も真如苑に限らず、社会集団一般に広く見られる現象であろう。とりわけ、真如苑ではそうした傾向が顕著で、「霊能の関連図」（第4章）によって見事に描き出された独特な信仰の型をもつことは十分理解できた。しかし、こうした真如苑において霊能の霊位まで昇りつめた信者が体得する世界観を、霊能の特徴と捉えてよいのか多少疑問が残った。

そもそも、各種の修行において、どのような能力を体得したものが、最終的に霊能者になるのだろうか。「霊能の関連図」を自らの世界観として十分内在化した者はすべて霊能者になれるのだろうか。霊位の相承を判断できるといふ真如苑全体で二〇名しかいない霊能者たちの判断基準も倫理性にあるのだろうか。評者が一般用語である「霊能」の意味に捕われているからなのかもしれないが、「倫理的に高潔であること」以外にも、霊言を発するミीडィアムとして体得する資質や能力はあるのではないかと考えてしまった。

仮に、真如苑の霊能が倫理性に収斂するとしても、それが醸成されるプロセスや社会状況への考察も掘り下げてあればよかったように思う。たとえば、5章では、二名の霊能者への詳細な聞き取りに基づき、霊位向上にともなう信仰のプロセスや信仰の途上で獲得される物語について興味深く論じてあった。なぜこの二人が聞き取りの対象になったのかの記述はないが、霊能者になった大半の人たちに共通する世界観、信仰物語を例示したものと推測できる。それでは、こうした均質的な世界観を

霊能者が獲得するのはどのような実践が関連しているのだろうか。霊能者の布教や活動実践の内容、他の多くの信者とのインタラクションの様子、さらには教団側の布教や信仰の教化戦略といった「霊能の社会化」についても言及されていけば、霊能の全体像がよりクリアになったように思う。

2 霊能者と一般信者、真如苑全体の関係について

第二に、霊能者と一般信者、および真如苑という組織全体の関係について考えてみたい。本書では、真如苑の魅力を探ること、また真如苑がなぜ八〇年代に急成長したのかを究明することも目標としており、その点では本研究における全体像は真如苑の霊能者にとどまらず、信者全体を含むことになる。

本研究で実施した霊能者のみへのアンケート調査、聞き取り調査によつて、真如苑全体のいかなる特徴が把握できるのか。霊能者はおそらく信者の多くがめざすべき存在であり、真如苑全体にとつての大きな魅力であることに評者は何の異論もない。それと同時に、霊能者は全信者の〇・一％程度の少数派であり、しかもその霊位に至るには入信から平均一七年かかる例外的な存在でもある。当然ながら、大多数の人たちは二〇年以上修行しても霊能の位に達することはない。現在、大乘、歓喜、大歓喜の霊位にある人たちは、本書で示した霊能者の辿つた信仰マップの途上にあるのだろうか。あるいは、最終的に霊能者になる人たちは、入信時や入信後の意欲なり各種修行における心構え、社会的属性などの点でほかの信者とは大きく異なっているのだろうか。いずれにせよ、霊能者とそれ以外の信者

との関係が明示されていけばよかつたように思う。

つぎに、「おわりに」で論じられた「誰でも霊能者になれる」という業績主義、能力主義的な霊能者養成システムの確立が、八〇年代に真如苑が急成長した大きな要因であるとしている点について触れたい。

そもそも、教団外部からは判断できず、教団内部においても相承を担当する二〇名の霊能者たち以外には判断基準が明確でないと思われる霊能への道のりは、一般的な意味での業績や能力として理解できる事柄だろうか。仮に、本書が示したように、真如苑独特の倫理性を霊能者が内面化するとしても、大多数の信者が達することのできない霊位に必要な業績や能力がいかなるものかについて、詳しい議論が必要だつたと考える。

評者がこうした疑問をもつのは、本書においては、七〇年代、八〇年代に霊能者養成システムが確立されていたプロセスについての記述があまりなかったことも関連している。それと同時に、霊能の業績主義、能力主義の導入が、信者の入信時点や入信後の信仰、活動において、どのように人々の修行する動機づけと関わっているかを示す必要があつたのではないか。たとえば、入信動機の四分の一を占める「霊的なものに対する関心や接心を受けた」という真如苑的動機について掘り下げた調査をするなど、霊能者と信者一般、さらには真如苑全体との関連について少し詳しく論じられていけば分かりやすかつたように思う。

以上、本書を通じて評者が感じた疑問点をまとめてみた。も

書評と紹介

ちろん、本書全体では、多彩な調査法を用いて、真如苑の霊能のリアリティを究明し、数々の示唆に富む分析、解釈がなされ、きわめて意義深い成果が随所に折り込まれている点は再度強調しておきたい。本書で著者たちが示した、宗教にかかわる社会調査の困難さとその克服方法は、現代宗教を扱う多くの研究者にとって大きな指針となるはずである。また、そこから得られた研究成果は、宗教研究のみならず、ほかの社会調査全般にも適用できる多大な可能性を秘めている。

評者は本書が展開する「開かれた」議論の場から大きな知的刺激を受け、宗教世界への多彩なアプローチについて改めて確認する機会を得た。長期間のねばり強い調査、分析、執筆によって本書を完成させた著者たちからよきエネルギーを与えていただいたことに深く感謝したい。

Jeremy CARRETTE and Richard KING

Selling Spirituality: The Silent Takeover of Religion

Routledge, 2005, xii+194 pp. £12.99

芳賀 学

足を蓮華座に組み、両手に印を結んだ一人の女性のシルエツトをバックに、緑でSELLING、青でSPIRITUALITYと記された表紙が印象的な本である。よく見ると、SELLINGのSがめになっていいる。それもそのはず、この本は、「スピリチュアリティ」という用語の普及と共に、現代世界において静かにしかし急速に進んでいる「聖（＝宗教）の商品化」に対する告発の書なのである（しかし、それがエキセントリックではないこともこのウィットに富んだ表現から想像されよう）。裏表紙の紹介によると、著者の一人であるJeremy Carrette氏は、英国カンタベリーのケント大学の教員、Richard King氏はインド哲学／宗教の研究者でいくつかの英国の大学で教えているとのことである。浅学のため管見の限りではないが、Carrette氏にはFoucault and Religion (2000)、King氏にはOrientalism and Religion (1999) などの著書があるという。その二人が、ダービーやパリやエジンバラで送った週末を含め、一年間にわたる共同作業の成果としてまとめたのが本書である。さて、ここで、まずはその内容を章別に紹介しておこう。